Title	ナホトカ号事故から幾年ぞ. 1
Author(s)	敷田, 麻実
Citation	朝日新聞
Issue Date	2003-08-07
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/34967
Rights	本著作物は、朝日新聞社の許可のもとに掲載しています。朝日新聞社の許可なく内容の全部又は一部を転載 することを禁じます。承諾番号23-3141
Туре	column
Note	石川版朝刊10版25面掲載、金沢アンダンテ
File Information	1283.pdf



剪皿 麻実

ホトカ号事故 から幾年ぞ(1)

かアンベン

題字は五木寛之氏

流れたのはもはや6年半前 の正月に島根県沖合で沈没 し、そこから大量の重油が ナホトカ号が1997年 意味を思い知らされた「で は、自分の仕事の重要性や なしたつもりだったが、中 でもこのナホトカ号事故

ことでなぜ、という思いだ がわからず、それくらいの った。しかし最初は重要さ でやっとはじまったばかり は、前年の国際シンポジウ だった。幸運にも水産課で ムのために、すでにインタ

ネットが活躍した。携帯電 た。その「空白」にインター とんど連絡がつかなかっ 月休みで、国内機関とはほ 深刻で、何をしていいのか わからない。さらに長い正 対策の初期は情報不足が っているが、油が固形化し ムページが見つかる。事故 を経験した今では誰もが知 ルディーズ号の記録のホー で検索すると、エクソンバ ーネットに接続していた。 オイルスピル(油流出)

話でメールがやり取りでき 揮発成分の消失と同時に毒 て扱いにくくなることや、 性も減少することなどが、 手に取るようにわかった。

> 県三国町で(敷田さん提 上げ作業=97年3月、福井

ホトカ号の船首部分の引き 重油流出事故を起こしたナ

が、過去の公害病や最近の くることも多い。いずれ も、正当な論理に思える ない」という責任論が出て な価値を損なうことはでき 学的に証明できないのだか できない危険性で、経済的 主張するのは「有害性が科 いう判断で、「使う側」 い。このような「灰色」の 薬剤を使うか使わないかと が、その影響も否定できな しいう論理だ。また「証明 っ、使用を止められない」

県庁勤務では、大きな仕事 くように感じる。15年間の もあり、日に日にナホトカ 紀が変わってしまったこと の話である。時が流れ、世 号の記憶は忘れ去られてゆ と困難な仕事をいくつもこ て来てほしいという依頼だ 夜だった。タンカーが沈没 水産課からも誰か県庁へ出 し重油が流れ出している、 絡が入ったのは1月3日の きごと」だった。 最初に消防防災課から連 ットが貴重な情報源になっ た。当時、県のインターネッ 事故の際には、インターネ もしれないが、ナホトカ号 トへの接続は、情報政策課 る今では当たり前のことか

後の対策でどれだけ冷静な この情報のおかげで、その 判断ができたかしれない。

験したが、なかでも分散 は、いくつもの「山」を経 ナホトカ号事故の対策で 決定は大きな山だった。分 剤、いわゆる中和剤の使用 散剤は一定の効果はある

ことは明らかだろう。 それが「まやかし」である 狂牛病問題の例を見れば、 (金沢工業大教授)